『東京大学言語学論集』**35** (2014.9) 41-62

現代標準アラビア語における動名詞対格 yumkinu 構文とその非典型的主語

—その広がりの可能性と現象への一考察—

後藤智明

elessar1014@yahoo.co.jp

キーワード： 法動詞　非典型的主語　意味役割　有生性

要旨

現代標準アラビア語（フスハー）では、主語は、動詞の形態を支配し、主格ないしそれに準ずる標識を取る典型的主語しかないと思われており、多くの文法書にもそう記されている。しかし、実際には、非典型的主語を含む構文も、現代標準アラビア語話者によって使用されていることが分かった。具体的には、サウジアラビア大使館が後援するアラブ・イスラーム学院で、講師執筆の教科書内の文章に、yumkinuを用いた非典型的主語の構文が見られ、講師による容認性判断でもその存在が確認できた[1]。またアラブ・イスラーム学院講師以外でも、都内のアラビア語話者や、ニュース等の文章で、yumkinuを用いた非典型的主語の構文の存在を支持できる例があった。この論文では、その非典型的主語がなぜ出現したかを、意味役割と有生性から分析し、その分析結果をアラビア語諸言語変種並びに他言語における非典型的主語についての先行研究と対照して、先行研究の結果と矛盾していないことを示す[2]。

1. はじめに

1.1 現代標準アラビア語とは何を指すのか

筆者は、ここで、現代標準アラビア語を、以下のように定義する。現代標準アラビア語は、アラビア語系諸言語の中の一変種であり、その中の規範的変種である。それは、理念上は、シーバワイヒの『キターブ』を初めとする、7世紀から10世紀までの古典規範文法主義者たちの規範主義文法書によって成立した古典アラビア語の規範文法に従い、そこから現代社会に必要な造語や借用語による新語を加えた以外変化を施されていない言語変種である。現実には、アラブ世界全域で、先に述べた規範的言語のつもりでアラビア語系現代口語諸変種の第一言語話者などが用いる諸言語変種（個人言語変種）の中でも、特にそれらの話者達に広く共通してみら

---

[1] アラブ・イスラーム学院、その講師、職員、受講生の方々、そして筆者の調査に協力して頂いた学院外のアラビア語話者の方々に厚く御礼申し上げる。また、第2章1節の、筆者がこのテーマを取り上げるに至るきっかけの出来事で、論文に取り上げた質問をした受講生の方に、個別に厚く御礼申し上げる。無論、この論文におけるすべての誤りは筆者がその責任を負う。

[2] なお、この論文では、以下の略記号を、注釈に使用する。筆者によるものは、SUB:主語、INDOBJ:間接目的語、PLACE:場所項、QSUB:非典型的主語、QOBJ:非典型的目的語、QSUBmarker:非典型的主語を直後に従える機能語、PLACEmarker:場所項を直後に従える機能語、INDOBJmarker:間接目的語を直後に従える機能語、3MS:三人称男性単数、3FS:三人称女性単数、2FS:二人称女性単数、1SG:一人称単数、VN:動名詞、STEM:語幹、NOM:主格、ACC:対格、GEN:属格、PREP:前置詞、PN:人名、DF:動詞定形、dual:双数、YNQmarker:肯定否定選択要求疑問文を導く機能語、PSUF:人称表示接辞、INDEF:不定、PL:複数、MODF:修飾語。Sigurðsson(2004: 142)とRögnvaldsson (1991:369)からの引用によるものは、DAT:与格。

れ、かつ特にそのなかでも、非アラビア語系諸言語第一言語話者への言語教育の場などの、規範的な学校教育の場で教授される言語である。

1.2　非典型的主語とは何か

主語は、通言語的、普遍的な定義が難しいものである。しかし、少なくとも、動詞形態が一項だけによって決定される言語の場合は、動詞の一致を引き起こすその一項こそが主語であると定義できる。また名詞の活用を持つ言語の場合、多くその主語は主格（または能格または絶対格）を取る。本論文で取り上げる、現代標準アラビア語も、動詞形態が一項のみに支配され、かつ名詞の格変化を有する言語である。

しかし、世界の言語の中には、たとえ一項のみに支配された動詞の活用を持ち、更には名詞の活用を持っていたとしても、この定義に当てはまらない主語を持つ言語が存在する。例として、アイスランド語の以下の例文を挙げる(Sigurðsson, 2004: 142)。なお、注釈、訳ともに、Sigurðsson（2004: 142)の内容に従い、行替えのみを筆者が施した。

(1.2-1) hun　　var　　syfjuð
she.NOM　　was　　sleepy

og　(henni)　　leiddist　　boken.　　(Sigurðsson, 2004: 142)
and (her.DAT)　　bored　　book.the.NOM　　(Sigurðsson, 2004: 142)

"She was sleepy and found the book boring."　　(Sigurðsson, 2004: 142)

この(1.2-1)の例文の、og 以下の節で、動詞を支配しているのは、bokenである。さらにこれは、主格ですらある。この章の冒頭の、主語の定義に従えば、これが主語である。しかし、Sigurðsson(2004: 142)によれば、これは主語ではなく、主語は、henniである。

その理由として、統語的な性質がある。アイスランド語における、動詞形態を支配する、また主格をとる、この章の冒頭の定義に当てはまる主語は、同じ主語が節をまたいで連続している場合、省略可能である。そして、ここでのhenniも、前の主格を取り動詞を支配する、上の定義通りの主語hunが、このhenniの前の節にあるため、話者は次の節のhenniを省略可能であると、Sigurðsson(2004: 142)は述べている。このことが、このhenniを、主語として分類する理由の一つであるとSigurðsson(2004: 142)は述べている。

この違いについて、また、Andrews (2004:85-86)は、この章の冒頭で挙げた主語の定義に合致するアイスランド語の主語を、典型的 (canonical)と呼ぶのに対し、(1.2-1)であげたようなその定義に当てはまらないが、統語的な操作が前者の主語と共通する主語を、非典型的(non-canonical)と呼んでいる[3]。本論文ではこの概念を現代標準アラビア語に適用し、現代標準アラビア語において、典型的主語に対比される非典型主語について述べる。

[3] Rögnvaldsson (1991)は、(1.2-1)のような主語に変わり種の主語（quirky subject）という用語を用いている。

1.3 現代標準アラビア語に非典型的主語は指摘されてきたか

上で挙げたとおり、典型的主語と非典型的主語の区別を認めたとき、非典型的主語は、典型的主語と共通する繰り上げ構文化や主語連続時省略などの統語的操作を自身に許すが、動詞形態への支配をまったく行わないか、少なくとも典型的主語と同じようには行わない。そして主格や能格や絶対格を取らない。ではこのような主語は現代標準アラビア語でこれまで指摘されてきただろうか。結論から言うと、少なくとも筆者の知る限り、理念的な標準アラビア語（フスハー）を規定する、既存の規範主義的な文法書では見られない。

既存の規範主義的文法書からは、アラビア語の主語は以下のように定義できる。動詞が述語である場合は、新妻(2009: 64, 84)の記述に従えば、その動詞活用を支配するものが主語である。現在時制におけるbe動詞なしの述定文や存在文の主語は、新妻(2009: 61-62)の記述に従えば、対応する過去時制文を作ってbe動詞kāna/yakūnu“存在する”の過去形kānaを出現させたとき、その動詞活用を支配するものである。

つぎに、上よりは副次的ではあるが重要な性質として、格変化での主格性がある。アラビア語には独立語名詞に、格変化があり、主格、属格、対格を取るが、この内主語は主格を取る。この格変化が存在しないのは、語彙的には代名詞や借用語（すべてではない）など、主語であってもそうでなくても同じ一つの形態を取るものである[4]。

以上、現代標準アラビア語の主語は動詞形態の支配で定義できる。それに続く重要な性質として、主格ないしそれに準ずる形態による標示が行われる。これら二つの性質は、上にあげた、典型的な主格対格型言語における主語の定義と合致する。

また、現代標準アラビア語内部での主語の、以上2つよりもさらに副次的性質として、動詞項を聞く疑問文の形式で、疑問の対象が主語であれば、疑問代名詞＋動詞の三人称主語対応形、という形式をとる。主語でない、目的語について言うと、間接直接ともに、目的語の性、数、人称に支配される人称接辞が動詞に付くことがある。しかし、この目的語表示の人称接辞は、動詞に直接付かず、前置詞に付くことも可能であることが少なくない。その点、上の主語に合わせた活用とは異なる。

独立語であれば間接直接の目的語は対格で表示される。独立語である間接目的語であれば、前置詞liなどの後ろに属格で置かれて表示されることもできる。疑問文は、疑問の対象が直接目的語の場合は疑問代名詞＋既知の主語に合わせた活用を取る動詞、間接目的語であれば、li＋疑問代名詞＋既知の主語に合わせた活用を取る動詞で形成される。

可能法動詞 yumkinu/ʔamkana も例外ではない。この動詞は、複数の構文的用法があるが、今回取り上げる構文は、Wehr (1994: 1076) によれば、要求する統語構造上、英語の to be possible に対応する。動名詞か補文節を主語とし、動名詞の主語（およびそれに準ずるもの）を間接目

---

[4] なお、主格性の例外に関連すると、強調構文である?innna節構文で、この?innaの直後に来る名詞は、新妻(2009: 81)に従えば主語とされているが、これは主語と主題を厳密に分ける視点に立つなら不適切な記述である。エベイド(2014、パーソナルコミュニケーション)およびAbdul-Raof(1998: 61)によれば、この構文は主題であれば主語であってもなくても適用可能であるので、主題性のチェックには使えても、主語性のチェックには使えない。

的語とする。動名詞は主格を取る。主語である動名詞が男性単数名詞なら yumkinu、女性単数名詞なら tumkinu が使用されるなど、主語である動名詞によって活用が支配される。

間接目的語について言えば、統語的独立名詞句が間接目的語の場合、yumkinu の後ろに前置詞li“～にとって”“～へ”“～において”を置き、更にその直後にその統語的独立名詞句を置くことで表現される。他言語での代名詞に相当する人称接辞が間接目的語であれば、その接辞をyumkinuに接続させることで表される。

動名詞の主語でもある間接目的語を質問する疑問文では、間接目的語を質問する形式である li（前置詞）＋man（疑問詞、誰）を用いる。これらのどこにも、非典型的主語の存在を疑わせるものを有さない。この構文を yumkinu 可能構文とし、動名詞使用 yumkinu 可能構文と、補文節使用 yumkinu 可能構文と下位分類を設ける。今回考察するのは、この内前者である。なお、この動名詞が単独で典型的主語である動名詞使用 yumkinu 可能構文は、動名詞主格 yumkinu 可能構文と以下呼ぶ。

1.4　調査の対象と方法論について

今回の論文でデータを取り上げる話者は、2013年から2014年にかけてアラブ・イスラーム学院で筆者が、個人的な質問や授業中の観察といった形で、動名詞使用 yumkinu 可能構文について、動名詞の格変化と、話者の主語意識、目的語意識、補語意識について調査をしてデータを得た、スーダン出身話者1、スーダン出身話者2、スーダン出身話者3、サウジアラビア出身話者1、の計4名が中心である。この4名はみなこの学院の講師である。また、補助的に、アラブ・イスラーム学院外の話者であるチュニジア出身話者1、エジプト出身話者1、リビア出身話者1の3名の話者のデータと、アラブ・イスラーム学院講師であるスーダン出身話者4のデータを、議論および今後の課題で、上4名のデータを検討する際の、補助的なデータとして用いる。また文字資料は、アラブ・イスラーム学院の教科書を主に用い、補助としてわずかばかりWorld Wide Web上のニュースサイトのページの文章を用いた。

なぜ、今まで筆者が調査したデータの中から、今回筆者がこの論文で上にあげた4名のデータを中心的に提示するかについて言えば、話者の性質、十分なデータが集められたかどうか、の二点がその理由である。

まず話者の性質から言えば、アラブ・イスラーム学院の講師の容認性判断は、単なるイディオレクトではなく、現実の現代標準アラビア語で広く使われ、規範的文脈でも容認される現象への、筆者が知る限りの最適な近似であると筆者は考える。その理由として、この学校の教育方針がある。この学校は、サウジアラビア大使館の関与する語学学校で、そこでは規範主義的アラビア語（フスハー）のみが、現代アラブ世界の共通語として、そしてアラビア語の唯一の“正しい”形として受講生に教えられている。それを簡潔に述べたのが、2006年当時のシンポジウムの内容をまとめた、アルジール(2006: 72)の以下の文言である。ここでは、アラブ・イスラーム学院でのアラビア語教育の特徴について、アルジール自身が当時の学院長として述べた、以下の文言がある。“”ではさみそれを引用する。

“同様に大切なのは、アラビア語の中でも正則アラビア語に従っているということである。それは必ずしもすべてが古典アラビア語というわけではないが、文法に従った正則である。” (アルジール、2006: 72)

ここで、アルジール(2006: 72)により、“文法”と称されているものは、現代記述言語学で、話者の頭の中にあると仮定される、話者の言語使用を律する規則や制約、傾向という意味での“内在文法”でもないし、その“内在文法”を調査と考察により探った結果の近似仮説である“記述文法”でもなく、現代標準アラビア語を含めた規範的アラビア語の、“規範文法”のことである。この一文で、アラブ・イスラーム学院という組織の、言語教育における規範主義的性格は表されている。

今回、上の例文の章で筆者が取り上げた4名の話者は、そのような理念に基づく組織に勤務する講師である。それ故に、これらの話者は少なくとも社会的に、十分な、アラブ世界の共通語である現代標準アラビア語の規範主義的教育を受けていると他者から認知され、また少なくとも自身もそのように自己認識していると筆者は推測し、かつその推測が妥当であると筆者は考える。そうであるので、これらの話者の容認性判断は単にイディオレクトとしてそうであるという次元を超えた実際の現代標準アラビア語の最適な近似であると筆者は考える。対して、アラブ・イスラーム学院外の3名は、その条件を満たしていないため、その容認性判断は単にイディオレクトとしてそうであるという次元を超えているといいづらい。

また、データから言えば、上記の4名の話者と違って、これら3名については、動名詞の格変化のデータを得られていない。アラブ・イスラーム学院講師であるスーダン出身話者4を除外するのは、現実の現代標準アラビア語の最適な近似であるという条件は満たしているが、動名詞の格変化も、主語意識や目的語意識や補語意識の調査も出来ず、疑問文のふるまいしか調べられなかったためデータ不足であるためである。すなわち、動名詞のふるまいについてと動名詞の主語のふるまいの双方について調査でき、またアラブ・イスラーム学院講師でもある話者4名を今回中心的な言語コンサルタントとして採用した。また文字資料について言えば、現代標準アラビア語では通常その文字資料内で母音を表記しないため、統語的機能の手がかりである格変化を知るためには、アラブ・イスラーム学院の教科書のような、アラビア語初級者向け教材を使うのが最適であるからである。

2. アラビア語講師による、非典型的主語の使用

この章では、現代標準アラビア語における非典型的主語について述べる。1章3節で述べたとおり、既存の規範主義的文法書の記述によれば、現代標準アラビアには典型的主語しか存在せず、yumkinu可能構文でもそれは同じである。

しかし、現実には、上の前提とは異なる言語現象が、アラブ・イスラーム学院で見られる。具体的には、上で挙げた4名の話者である、スーダン出身話者1、スーダン出身話者2、スーダン出身話者3、サウジアラビア出身話者1、のそれぞれがそれぞれ異なった機会に、筆者ないし

は他の人物の質問に対し、以下の特徴を持つ構文を自発的に発した。これを、動名詞対格 yumkinu 可能構文と呼ぶ。上で挙げた、既存規範主義文法書にある動名詞主格 yumkinu 可能構文と比較した場合に見られる、2 点の相違に注目して以下にまとめる

性質①：動名詞主格 yumkinu 可能構文の間接目的語、動名詞の主語は、話者の知覚で、主語性を帯びている。ただ、形態論上は、yumkinu-人称表示接辞、もしくは yumkinu＋li＋NP となるので、動名詞主格 yumkinu 可能構文での形と同じである。

性質②：動名詞は主語性を減じ、対格を取る。目的語（スーダン出身話者 1、スーダン出身話者 2、スーダン出身話者 3）ないしは補語（サウジアラビア出身話者 1）として話者に見なされている。

この内、性質①を見れば、ここで yumkinu に対する主語性を帯びている動名詞の主語（あるいは補文節の主語）は、上で挙げた典型的主語と非典型的主語の内、非典型的主語に当たることがわかる。なぜならこの語は、典型的主語が動詞を支配した時の人称表示を含む部分、この構文であれば yumkinu の部分を支配しておらず、間接目的語の人称表示と同じ形の部分を支配しているからであり、この点では、形態上は対応する既存の規範主義文法書における構文で、動名詞の主語が間接目的語人称表示を支配しているのと変わらないからである。

筆者は、性質②については、動名詞を補語でなく、目的語と見なす。なお、非典型的主語が登場する構文での目的語は、以下この論文では一律に非典型的目的語と仮にみなす。

2.1　教科書と録音の修正として現れた、動名詞の主語の非典型的主語性と動名詞の脱主語化

以下に示すのは教科書の文章やその録音が、動名詞が典型的主語である動名詞主格 yumkinu 可能構文であるのに対し、それをスーダン出身話者1が非文とみなし、それを非典型的主語を含む動名詞対格 yumkinu 可能構文に訂正したものである。動名詞主格 yumkinu 可能構文の例文は以下である（アラブ・イスラーム学院、2009: 151）。注釈と訳は筆者による。

(2.1-1)　yumkinu-nī　　ʔakhdh-u
be possible.3MSSUB.DF-1SG.INDOBJ.PSUF　　taking.VN.3MS.SUB-NOM

qiyās-i　　ḍaghṭ-i　　d-dam-i.　（アラブ・イスラーム学院、2009: 151）
check-GEN　　pressure-GEN　　the-blood-GEN

「血圧測定をすることは私にとって可能である。」

ここでは、統語上の主語は、動名詞 ʔakhdhun であり、文中では ʔakhdhu である。これは統語上の主語が通常とる形、主格をとっている。動詞も yumkinu と、三人称男性単数主語に対応しており、ʔakhdhu の統語的文法性数である男性単数に基づいた活用をしている。規範主義的文法書が載せているとおりの、動名詞使用 yumkinu 可能構文である。

しかし、この文について、スーダン出身話者1は、これを誤文と認識し、訂正指示として、以下の文を発話した。

(2.1-2) yumkinu-nī ʔakhdh-a
can.STEM-1SG.QSUB.PSUF taking.VN.3MS.QOBJ-ACC

qiyās-i ḍaghṭ-i d-dam-i.
check-GEN pressure-GEN the-blood-GEN

「私は血圧測定をすることを出来る。」

ここでは、動名詞ʔakhdhunは、主語が通常とる形主格ʔakhdhuではなく、対格ʔakhdhaを取った。これについてスーダン出身話者1は、述語動詞yumkinuの主語は、この対格の動名詞ʔakhdhaではなく、一人称単数代名詞であるʔanāであると述べた。そして、yumkinu-nīを、it is possible for meではなく、I canであると説明した。最後に、すでに現代標準アラビア語の規範的文法書の知識を持つ、筆者以外のある一人の受講生が、動名詞ʔakhdhunはここでは主格ʔakhdhuを取るのではないかという質問をした際に、スーダン出身話者1は上の説明をしつつ、この動名詞ʔakhdhunは、目的語であるのだから、主格ʔakhdhuではなく、対格ʔakhdhaを取るのだと述べた。

更にもう一つ同様の例文がある。教科書では、同じく動名詞が典型的単一主語であった動名詞主格yumkinu可能構文が存在する（アラブ・イスラーム学院、2009: 153）。これも、注釈と訳は筆者による。

(2.1-3) hal yumkinu-nī
YNQmarker be possible.3MSSUB.DF-1SG.INDOBJ.PSUF

faḥṣ-u ʕayn-ay-ki ?
checking.VN.3MS.SUB-NOM eye-dual.GEN-2FS.MODF.PSUF

「あなたの二つの目を調べることが私にとって可能か？」

しかし、スーダン出身話者1は、これを、以下のように修正させた。

(2.1-4) hal yumkinu-nī faḥṣ-a
YNQmarker can.STEM-1SG.QSUB.PSUF checking.VN.3MS.QOBJ-ACC

ʕayn-ay-ki ?
eye-dual.GEN-2FS.MODF.PSUF

「あなたの二つの目を調べることを私は出来るか？」

これについても、動名詞は目的語であるためであるとその理由を述べた。両者とも、規範主義者的文法書、狭義の現代標準アラビア語の文法について述べた書籍で述べられている、動名詞単一主語の構文を誤文として訂正し、変わって動名詞の主語を非典型的主語としている。

2.2筆者の作文に対する訂正として現れた動名詞の主語の非典型的主語性と、動名詞の脱主語化

この章では、筆者の提示文に対する容認性判断でも、動名詞の主語の非典型的主語性と、動名詞の脱主語化を、スーダン出身話者2とスーダン出身話者3が示したことを述べる。

スーダン出身話者2は、筆者が、動名詞ʔistiʕāratunがyumkinuを用いた可能構文に登場するとどうなるのかという質問をした際、それへの説明を行った。筆者が予想した構文は、既存の規範主義的文法書から組み立てた以下の例文である。

(2.2-1) hal　　tumkin-nī
YNQmarker　be possible.3FSSUB.DF-1SG.INDOBJ.PSUF

stiʕārat-u　　hādhā　l-kitāb-iʔ
borrowing.3FS.SUB-NOM　this　the-book-GEN

「この本を借りることは私にとって可能か？」

しかし、これはスーダン出身話者2に拒絶された。スーダン出身話者2にとっての正文は以下である。

(2.2-2) hal　　yumkin-nī　　stiʕārat-a
YNQmarker　can.STEM-1SG.QSUB.PSUF　borrowing.3FS[5].QOBJ-ACC

hādhā　l-kitāb-iʔ
this　the-book-GEN

「私はこの本を借りることを出来るか？」

この構文で、動名詞ʔistiʕāratunは、対格stiʕārataである。そしてこれはこの構文の目的語であると述べていた。そしてこの構文で主語は、ʔanā“私”であると述べていた。そして、この動詞yumkinu/ʔamkanaは、特殊な動詞であるため、通常の動詞の活用ではなく、上の例文ではnīとなっている、典型的動詞では目的語を示すのと同じ形式が、この動詞ではその主語に対応するのだと述べた。また、スーダン出身話者2は、既存の規範主義文法書の記述から想定されるtumkinuという活用形の存在を認めなかったが、それについては以下で再述する。

筆者がスーダン出身話者3に質問した時の、スーダン出身話者3の回答でも、動名詞は対格であり、筆者は本質的にはスーダン出身話者2と同じ説明を受けた。筆者が予想した例文では、やはり動名詞主格yumkinu可能構文を用いた。

(2.2-3) li　　ḥasan-i-n　　nuqūd-u-n　（中略）.
PREP.PLACEmarker　PN.PLACE-GEN-INDEF　money.PL-NOM-INDEF

yumkinu　　li　　ḥasan-i-n
be possible.3MSGSUB　PREP.INDOBJmarker　PN.INDOBJ-GEN-INDEF

ʔadh-dhahāb-u　　ʔilā　　l-mustashfā　（後略）.
the-going.VN.SUB-NOM　to　the-hospital

「ハサンには金がある（中略）。病院に行くことはハサンにとって可能である（後略）。」

---

5 筆者の調査で、スーダン出身話者 2 がこの語の後ろに性質名詞述語 mumkinun/mumkinatun“可能である”を従えた時、男性単数名詞主語に支配された形式 mumkinun を拒絶し、女性単数名詞主語に支配された形式 mumkinatun を選んだ。

しかし、これはスーダン出身話者3に拒絶され、スーダン出身話者3からは、動名詞の格だけが違う以下の例文が回答された。

(2.2-4) li ḥasan-i-n nuqūd-u-n （中略）.
PREP.PLACEmarker PN.PLACE-GEN-INDEF money.PL-NOM-INDEF

yumkinu li ḥasan-i-n
can.STEM PREP.QSUBmarker PN.3MS.QSUB-GEN-INDEF

ʔadh-dhahāb-a ʔilā l-mustashfā （後略）.
the-going.VN.QOBJ-ACC to.PREP the-hospital

「ハサンには金がある（中略）。ハサンは病院に行くことを出来る（後略）。」

ここでも、動名詞ʔadh-dhahābaは目的語として、対格を取っている。以上、2名、筆者の予想した、動名詞主格の構文を拒絶し、変わって動名詞対格の構文を提示した。

2.3 教科書に現れる動名詞の主語の非典型的主語と動名詞の脱主語化

この節では、教科書においても、動名詞の主語の非典型的主語性と、動名詞の脱主語化を示す構文があったことを示す。教科書の例文を転写したものは以下のものである。この教科書は母音符号付きで表記されていた（アラブ・イスラーム学院、2007: 43)。注釈と訳は筆者がこれを行った。

(2.3-1) yumkinu-hā taḥwīl-a
can.STEM-3FS.QSUB.PSUF changing.VN.QOBJ-ACC

l-ghaḍab-i ʔilā faraḥ-i-n （中略）
the-anger-GEN to.PREP happiness-GEN-INDEF

wa ʔishʿār-a n-nās-i
and notification.VN.QOBJ-ACC the-human.PL-GEN

bi l-faraḥ-i wa s-surūr-i. （アラブ・イスラーム学院、2007: 43)
by.PREP the-happiness-GEN and the-pleasure-GEN

「それ（具体的にはジョーク：筆者注、後述）は怒りを幸福に変えることを、[そして悲しみを喜びに変えることを、そして苦しい気持ちをいつも通りの気持ちに変えることを、そして怒りの鋭さを和らげることを、] そして人間に幸福と喜びを知らせることを、出来る」

筆者は、この例文にある動名詞taḥwīl-a、ʔishʿār-a、そして省略された部分にある動名詞takhfīf-aの3つすべてについて質問した。これらがすべて主格になった構文をサウジアラビア出身話者1が答えるのではと筆者は想定して質問した。

しかし、サウジアラビア出身話者1は、上の例文(2.3-1)のとおりのこの教科書の母音表記を正文とし、筆者がこの動名詞を主格に変えたものを非文として認めなかった。すなわち、これら3つの動名詞すべてについて対格のみが現代標準アラビア語で許容されるといったのである。そしてその説明として、yumkinu-hā の hā は、“ʔism kāna” すなわち be 動詞の主語、動名詞は

その “khabar kāna” すなわちその補語であると述べた。この分析の当否については、第2章の冒頭で筆者が述べたとおり、筆者はこの分析を否定するが、ここで筆者が重要視しているのは、少なくとも動名詞が主語ではなく、一方 yumkinu に接辞する人称接辞hā（具体的には ʔal-fukāhatu “ジョーク” を指している）が主語であるとサウジアラビア出身話者1が述べていることと、サウジアラビア出身話者1が動名詞を主格にした文をはっきりと非文としたことである。それも、3つのすべての動名詞についてであるため、より動名詞対格 yumkinu 構文の確からしさが高まる。

2.4　第2章まとめ

2章の1節から3節まででみたように、筆者自身が、もしくは筆者以外の人間が提示した、動名詞主格yumkinu可能構文は、4名すべてがそれを拒絶した。その代わりに、4人ともすべて、動名詞を対格にした例文を提示した。

これらの説明として、話者たち4人は、一様にこの述語動詞 yumkinu の主語は動名詞の主語（意味上、実際に動作を行う行為者）であり、動名詞は、主語ではなく目的語（3名）、補語（1名）であると答えた。1名の話者であるスーダン出身話者2は、例文(2.2-1)と(2.2-2)についての質問への答えで、この yumkinu/ʔamkana は非典型的動詞(irregular verb)で、典型的動詞の三人称男性単数と形は共通しているが、主語は hā や nī、すなわち典型的動詞ではその目的を示す人称接辞と同じもので示されるのだと筆者に回答した。

また、tumkinu が登場しうる、女性単数名詞の動名詞が登場する文は、筆者の調べた限り教科書内では、見つからなかった。また1人だけへの調査であるので、単なる個人言語変種の可能性を排除できないが、筆者が質問で、tumkinu を引き出すエリシテーションのために、女性単数名詞の動名詞を構文内で使用した、例文(2.2-1)でも、スーダン出身話者2の答えは、例文(2.2-2)で見られるように、yumkinu であった。スーダン出身話者2は上のように、tumkinu という形を拒絶した。

3. 現代標準アラビア語における動名詞使用 yumkinu 可能構文での非典型的主語の広がりの可能性

第 2 章で示した通り、アラブ・イスラーム学院の講師により書かれた教科書や、その発話、受講生への質問に対する回答からみた、講師の容認性判断では、法動詞 yumkinu について、動名詞を典型的主語としてとる動名詞主格 yumkinu 可能構文でなく、動名詞の主語を非典型的主語として取る動名詞対格 yumkinu 構文が使用されている。この章では、後者と完全に一致すると確認できないが、少なくとも動名詞の主語が非典型的主語ととれる yumkinu 可能構文が、アラブ世界で広く広まっている可能性を指摘する。

3.1　第2章で現れた構文の社会的評価についての考察

この節では第 2 章で確認された動名詞対格 yumkinu 構文がイディオレクトに留まらないことを示す。まずその性質を再掲する。

性質①：動名詞主格 yumkinu 可能構文の間接目的語、動名詞の主語は、話者の知覚で、主語性を帯びている。ただ、形態論上は、yumkinu-人称表示接辞、もしくは yumkinu＋li＋NP となるので、動名詞主格 yumkinu 可能構文での形と同じである。

性質②：動名詞は主語性を減じ、対格を取る。目的語（スーダン出身話者 1、スーダン出身話者 2、スーダン出身話者 3）ないしは補語（サウジアラビア出身話者 1）として話者に見なされている。

この構文については、全講師 8 人の内から、動名詞の格変化と主語意識や目的語意識や補語意識を筆者が調査した 4 人について、その 4 人全員がこの、動名詞の対格化を許容した。そして、筆者への説明で、主語は yumkinu の後ろに付く人称接辞が指示するものであり、動名詞は主語ではない。目的語（3 名）ないしは補語（1 名）であると述べた。そのうちの 1 名であるスーダン出身話者 2 は、この yumkinu/ʔamkana は非典型的動詞(irregular verb)で、典型的動詞の三人称男性単数と形は共通しているが、主語は hā や nī、すなわち典型的動詞ではその目的語を示す人称接辞と同じもので示されるのだと筆者に回答した。少なくともここから、アラブ・イスラーム学院におけるこの構文の存在は確かである。

この現象についていえば、これは単なる個人言語変種であり、かつ現代標準アラビア語の規範主義文法の教育が十分影響していない話者の個人言語変種故このような言語現象が起こったと、この現象を捉えるのは無理があると筆者は考える。その理由は、2 つある。

まず 1 つはデータ選定理由にもあげた、話者の性質から、この非典型的主語を含む構文が、現代標準アラビア語として広く言語使用され、かつそれは規範主義的レジスターまで及んでいる可能性がある。

つぎに、話者の地域的な隔たりである。スーダン出身話者 1、スーダン出身話者 2、スーダン出身話者 3、のみが非典型的主語を容認したのであれば、地域的な特徴の可能性が強く疑われるが、今回サウジアラビア出身話者 1 が、容認性判断において、教科書内の非典型的主語を正文と認め、筆者が発した、動名詞主格 yumkinu 構文を非文とした。これは、地域的な現代口語アラビア語系諸言語変種からの影響や、地域的な現代標準アラビア語と現代口語アラビア語系諸言語変種の中間言語、という解釈よりも、アラブ世界全体で、現代標準アラビア語としてこの構文が使用され、かつ規範主義的レジスターにも及んでいる解釈をより合理的とする根拠となる。

以上から、第 2 章のデータは、動名詞対格 yumkinu 可能構文が単なるイディオレクトではなく、現代標準アラビア語として広く通用する可能性を支持する。

3.2　他の話者および、web上のニュースサイトから見るyumkinuの非典型的主語

この章では、第 2 章及び第 3 章 1 節の冒頭で述べた動名詞対格 yumkinu 可能構文の 2 つの性質の内、動名詞の扱いについての性質②は不明だが、動名詞の主語が yumkinu の非典型的主語

である性質①では一致する構文が、第2章の話者4名以外にもみられることを示す。論拠として、yumkinu 構文での動名詞の主語を質問する疑問文の構造が、典型的主語を持つ主節動詞の主語を質問する疑問文の構造と同じであることを用いる。例としては、チュニジア出身話者1と、web 上の文字資料を挙げる。

チュニジア出身話者1は、動名詞使用 yumkinu 可能構文で、誰がその動作をしたのか、すなわち動名詞の主語を疑問文において、これを yumkinu の主語としてあつかい、間接目的語として扱わなかった。その例文が、(3.2-1)である。

(3.2-1) man　yumkinu-hu　ʔistiʕārat-u
who.3MS.QSUB　can.STEM-3MS.QSUB.PSUF　borrowing.VN-NOM

hādhā　l-kitāb-a?
this　the-book-ACC

「誰がこの本を借りることを出来るか？」

人称接辞を前置詞に接続させた (3.2-2)については、これを容認したものの、その容認度は、(3.2-1)の例文の容認度に比べて低かった。

(3.2-2) man　yumkinu　la-hu
who.3MS.QSUB　can.STEM　PREP.QSUBmarker-3MS.QSUN.PSUF

ʔistiʕārat-u　hādhā　l-kitāb-a?
borrowing.VN-NOM　this　the-book-ACC

「誰がこの本を借りることを出来るか？」

そして、前置詞＋疑問詞を文頭に持ってきた場合は、チュニジア出身話者1はこれを非文とした。

(3.2-3) *li　man　yumkinu
PREP.INDOBJmarker　who.3MS.INDOBJ　be possible.3MSSUB.DF

ʔistiʕārat-u　hādhā　l-kitāb-a.
borrowing.VN-NOM　this　the-book-ACC

「誰にとってこの本を借りることは可能か？」

これらでは、動名詞は主格、その直後に続く動名詞の目的語は対格である。しかし、筆者はこのチュニジア出身話者1への調査結果から、動名詞の統語的な扱いについては確定できない[6]。その理由として、実際の調査では動名詞使用 yumkinu 可能構文についての質問で、チュニジア出身話者1は動名詞や動名詞目的語の格変化について、わからないという答えや、二転三転す

[6] そのため、この動名詞には、統語的役割を筆者が現時点で確認できなかったので、注釈に統語役割を振らなかった。また、この動名詞についていえば、チュニジア出身話者1は、この語の後ろに性質名詞述語 mumkinun/mumkinatun “可能である” を従えた時、男性単数名詞主語に支配された形式 mumkinun を選択し、女性単数名詞主語に支配された形式 mumkinatun を拒絶したので、この発話では 3MS としてふるまっているが、上の例文(3.2-1)から(3.2-3)では動名詞が項なのか述語の一部なのかわからないので、この注釈も振らなかった。

る答えが多く、上の例文を聞き出す際も、動名詞の格が対格、動名詞の目的語の格が属格、になった答えも出た。そのため安定した傾向は筆者にはつかめなかった。動名詞が安定して主格、動名詞の目的語が安定して対格である場合、この構文では、動名詞が yumkinu の項でなく、可能動詞 yumkinu に続く具体的動作を示す動詞定形に準じた統語的役割[7]を担っている可能性もあるが、そのような安定は見られなかった。ゆえに、性質②をこの構文が満たすかは筆者はそれを主張できない。

しかし、ここで筆者が指摘したいのは、少なくとも疑問文形成のやり方で、動名詞の主語は、yumkinu の主語であるかのようにふるまい、間接目的語としてはふるまっていないことである。これは、少なくともこのチュニジア出身話者 1 の個人言語で、yumkinu の非典型的主語として動名詞の主語はふるまっていることの証拠の一つにはなると筆者は主張する。

この man yumkinu-hu?の構造の疑問文は、アラビア語で man yumkinuhu？（アラビア文字表記）で検索すれば、いくつか見つかる。その例文の一つが、フランスの国際ニュースチャンネル『フランス 24』の Web サイトの、アラビア語版にある、Mujīd(2014)による 2014 年 2 月 12 日付の記事（URL は参考文献に掲載）から、そのタイトルである以下の文章 سوريا: من يمكنه إنقاذ التراث؟ の：からさきの部分を、筆者が転写した例文[8]である。注釈と訳は筆者がこれを行った。

(3.2-4) man　　yumkinu-hu
　　who.3MS.QSB　　can.STEM－3MS.QSUB.PSUF

ʔinqādh　　t-turāth?　(Mujīd、2014)
preserving.VN.3MS　　the legacy

「誰が遺産を保存することを出来るか？」

ここでも、疑問文形成で、主節述語の典型的主語を聞く際の疑問文と同じ操作が、yumkinu-hu の hu である、ʔinqādh の主語に対して行われた。もしこれが述語の間接目的語を聞く疑問文であれば、li man yumkinu となると予想される。これも、上のチュニジア出身話者 1 の例文同様、性質①の条件のみはこれを満たしている非典型的主語の構文であると筆者は主張する。

以上の傍証で挙げた例文は、動名詞の扱いについては動名詞対格 yumkinu 構文と同じとは言い切れない。しかし、上で挙げたこの構文の特徴の内、性質①のみは、少なくとも満たしていると筆者は考える。

以上のことから、動名詞対格 yumkinu 可能構文よりも条件の緩い、少なくとも性質①を満たす、動名詞使用 yumkinu 可能構文は、アラブ世界で広く現代標準アラビア語として通用し、規範的なものの中に入ると認識されている可能性への傍証にはなると筆者は考える。

---

[7] 非常に粗雑なたとえであることを承知で言えば、英語の、can＋動詞の、動詞にあたる機能。

[8] なお、これは、シリア内戦における文化遺産の破壊を扱った記事である。動名詞の格と、動名詞の目的語の格は、狭義の現代標準アラビア語に合わせて、仮にそれぞれ主格、属格で転写することを考えたが、ここではあえてそれについては言及せず、名詞語幹のみとする。その理由として、名詞活用は、規範主義的な現代標準アラビア語では、古典アラビア語同様、発話区切り前を除くすべてでそれが存在するとされるが、実際の現代標準アラビア語では、格変化は使われないことが多いからである。ただしアラブ・イスラーム学院での教授言語では比較的格変化が入る。講師同士の対話では格変化の使用率は落ちる印象を筆者は受ける。

3.3　第3章まとめ

第 2 章でみた講師である 4 名の話者への調査と、第 3 章で見たそれ以外の話者であるチュニジア出身話者 1 への調査、そして web 上の例文から、現代標準アラビア語における動名詞使用 yumkinu 可能構文の非典型的主語の存否について、以下のことを筆者は主張する。

まずは性質①と性質②の 2 つの性質をともに満たす、非典型的主語保有構文として、動名詞対格 yumkinu 可能構文が、4 名の話者全員から聞かれた。第 3 章 1 節で述べた理由から、これがイディオレクトであることは考えにくい。動名詞対格 yumkinu 可能構文はたとえ規範主義的既存文法書で認められていなくても、現実には現代標準アラビア語として使用され、規範的文脈でも認められている可能性を筆者は主張したい。

次に第 3 章 2 節で示した通り、動名詞対格 yumkinu 可能構文の性質の内、動名詞の脱主語化という性質②の条件は満たさないかもしれないが、動名詞の主語の非典型的主語化という性質①のみは満たす構文が、チュニジア出身話者 1 の発話や、web 上のニュースサイトでの文章中に見つかる。動名詞使用 yumkinu 可能構文で、動名詞の主語が yumkinu の非典型的主語である性質①の現象だけ言えば、現代標準アラビア語として広く使われている可能性、規範主義的文脈でも認められている可能性がより確からしいことを筆者は主張したい。

4.　何故このような現象が存在するのか

前章までで、動名詞対格 yumkinu 可能構文、およびそれを含めた、非典型的主語を持つ yumkinu 可能構文が、現代標準アラビア語の中で広く使用されている可能性を主張した。ここでは、この構文の存在を前提として、動名詞対格 yumkinu 可能構文について、考察の的を絞り、なぜこの現象が起こるかを、説明する。まず、この構文について、意味役割から見た主語へのなりやすさ、有生性の高さ、動名詞の主語と yumkinu の主語の一致不一致の、3 つの視点から説明を試みる。

次にアラビア語系諸言語内部や他言語での、非典型的主語の存在を示す現象とも比較し、意味役割と、有生性の点で共通した説明が出来るため、本論文で扱った現象と先行研究の例は調和することを示す。

4.1　意味役割、有生性、主語揃え

まず、この現象だけに注目した説明を試みる。用いる理由付けは、意味役割、有生性、動名詞と主節述語の主語の統一、の 3 つの議論的視点である。その結果、yumkinu の表すイベントで、動名詞も動名詞の主語も、意味役割上、主語になりやすさが同じくらいであること、そして有生性の観点からすれば、動名詞の主語が、動名詞より有生性が高いことが多いので、有生性が高いことから主語になりやすいこと、そして動名詞の主語と yumkinu の主語をそろえるのが無標ではないかということ、以上から動名詞対格 yumkinu 可能構文で、動名詞の主語が、非典型的主語になると説明する。

まず、意味役割上の説明を試みる。前提として、法動詞の表すイベントにおいては、動名詞や補文節は、意味役割上存在物乃至被設置物（theme）であり、動名詞や補文節の主語は、意味役割上存在場所乃至所有者（location）であると筆者は考える。理由は、動名詞や補文節の指示対象は、法動詞の表すイベント内で他の登場物に何も影響を与えず、また与えられもせず、ただ存在するだけだからであり、その存在場所は、その動名詞や補文節の主語の指示対象の元だからである。傍証としては、英語の法表示表現 have to do は、その法動詞 have to が、通時的には所有動詞 have に由来することや、アムハラ語では、共時的に、動名詞を統語的主語とし、コピュラ動詞 näw や存在動詞 älläh を述語とし、人間を統語的存在場所項(place)とした構文で、法表現を行うことが見られる（若狭、Tessema、2011: 102）ことである。

このように、意味役割上動名詞や補文節は法動詞構文の主節述語である法動詞の表すイベントにおいて存在物乃至被設置物(theme)であり、動名詞ないし補文節の主語は存在場所乃至所有者（location）である。これが、動名詞対格 yumkinu 構文で、非典型的主語が存在する理由の一つである。なぜならば、通言語的な性質として、存在物乃至被設置物(theme)と存在場所乃至所有者（location）では、意味役割上の行為者（agent）と被行為者（patient）でなりたつイベントで前者が圧倒的に統語的主語になりやすいことに比べれば、統語的主語へのなりやすさが同等に近い。agent と patient であれば、無標な統語構造は、英語と日本語でそのどちらでも、以下のように agent が主語、patient が目的語になると筆者は考える。ここでは agent は Mary/メアリーであり、patient は John/ジョンである。

(4.1-1) Mary hit John.

「メアリーがジョンを殴った」

(4.1-2) メアリーがジョンを殴った。

しかし、存在物乃至被設置物(theme)と存在場所乃至所有者（location）であれば、そうはいかない。どちらが統語的主語になるかが無標かは、言語ごとに違い、少なくとも上ほどはっきり自明ではない。たとえば存在所有構文でも、存在構文か、所有構文か、どちらが無標かは言語ごとに分かれる。英語であれば、意味的に所有側によっている場合、構文上は次のようになりやすい。ここでは、location の I が主語で、theme の a house が目的語である。

(4.1-3) I have a house.

「私が家を持っている。」

しかし、同じ事態を表すのに、日本語であれば、こちらの構文も可能である。ここでは、location の“私”が場所項で、theme の“家”が主語である。

(4.1-4) 私に家がある。

意味役割が同じ、可能法動詞に関する構文でも、存在物乃至被設置物（theme）の動名詞と、存在場所乃至所有者(location)の動名詞の主語のどちらも、意味役割上同等に、可能法動詞の統語

的主語になりやすいといえる。このように、意味役割上、動名詞と、動名詞の主語のどちらも、動名詞使用yumkinu構文の主語となることが同じくらい無標であることが、動名詞対格yumkinu可能構文という、この非典型的主語保有構文が発生した理由の一つであると、筆者は考える。

しかし、これだけでは、動名詞ではなく、動名詞の主語が、非典型的主語であるとはいえ、主語であるのか説明できない。同等の意味役割上の主語へのなりやすさなら、動名詞が主語であってもありえるからである。

これへの説明の一つとして、有生性の観点から、この構文がなぜ存在するかを説明する。動名詞と、動名詞の主語の、それぞれの有生性について考えると、人であることの多い動名詞の主語が、抽象的存在である動名詞よりも、有生性が高い。そして、人間は、有生性が高いものをイベントの中心と認知しやすい[9]。また、その認知傾向をそのままダイレクトに構文に反映させた場合にその有生性の高いイベントの中心と見なされたものが主語となる。

そのため、動名詞対格 yumkinu 可能構文で、動名詞の主語がその非典型的主語であることは、有生性の観点からして自然である。上の例文では、動名詞の主語が人間でなく、動名詞と同じ抽象的な概念である場合でも、動名詞対格 yumkinu 構文が見られたが、ここでも、純粋な抽象的概念である動名詞よりは、動名詞の主語が、たとえ同じ抽象的概念であっても、動作を行える存在である以上、有生性が高いものに準ずるものとして扱われることが可能なので、破たんは生じないと筆者は考える。

またこれに加えて、有生性の点で、動名詞の主語が人間でない場合でも、動名詞対格 yumkinu 可能構文が発生し、動名詞の主語がその構文の非典型的主語であるのはなぜなのかについて、別の説明も可能である。これは、主語の統一という原理を挙げたい。具体的な動作のイベントを表す動名詞ないし補文節の主語と、法に関するイベントを表す主節の主語が一致しない状態よりも、具体的な動作のイベントを表す部分の主語が、そのまま法に関するイベントを表す主節の主語でもあった方が、自然であるという仮説である。

以上、意味役割上、有生性上、yumkinu の主語と動名詞の主語との一致、の 3 つの観点から、動名詞対格 yumkinu 可能構文での、非典型的主語が存在する理由を考察した。結果得られた仮説として、以下の物がある。動名詞対格 yumkinu 可能構文のように、2 つのイベント登場物において、意味役割上どちらも統語的主語になりやすく、かつ有生性の上で一方が他方を上回っている（もしくは多くの場合上回りやすい）構文では、その有生性で上回っている一方が主語になりやすい。そしてその主語の中でも、動名詞使用 yumkinu 構文の動名詞の主語は動詞の形態を典型的な形で支配していないので、　非典型的主語になる。また、動名詞と法動詞の主語を一致させるのが無標である可能性がある。

---

[9] これについては、Payne (1997: 128, 149-151)に、人間は有生性の高いもの、より正確には動くもの、他者に力を及ぼすものを、（特に他動詞の）主語、主題、意味役割上の行為者としやすいという趣旨が述べられている。

4.2 他言語とアラビア語諸変種での非典型的主語との比較

上では、今回のアラブ・イスラーム学院で観察された、動名詞対格型 yumkinu 可能構文について、その現象の起こる理由を分析した。その結果、非典型的目的語である動名詞と非典型的主語である動名詞の主語が、ともに yumkinu の表すイベントで、意味役割上主語になりやすさが同じくらいといえること、動名詞の主語の方が動名詞より有生性が高いことが多いので主語になりやすいといえること、動名詞や補文節の主語と yumkinu の主語を一致させることの方が、主語が食い違うことよりも無標であると考えられること、これら 3 つの要因が動名詞対格 yumkinu 可能構文での非典型的主語の存在理由として重要であることを筆者は主張した。

ここでは、この内、意味役割と有生性の果たす役割についての主張を検証するため、他の言語における非典型的主語の例と対照する。その結果わかることは、これらの構文は、イベントの構成要素物の中で統語上の主語を選ぶとき、意味役割上で主語であることが無標の構成要素物が複数あること、その構成要素物の中で、有生性がより高いもしくは高くなりやすい方が、非典型的主語になっていること、これらについて、動名詞対格 yumkinu 構文と一致する。であるので、動名詞対格 yumkinu 可能構文の説明で述べた、意味役割上の無標主語の複数性と、有生性の高低が、この構文における非典型的主語の存在の理由であるという主張は、これら先行研究の非典型的主語の例と調和しているということを筆者は主張する。

(1.2-1)でその例文を挙げた、アイスランド語について、別個に以下に例文を挙げる。例文、訳、注釈とも、(Rögnvaldsson, 1991: 369)の内容をそのまま用いて引用する。

(4.2-1) Mér　　líkar　　maturinn. (Rögnvaldsson, 1991: 369)
　　Me (DAT)　　likes　　the food　(Rögnvaldsson, 1991: 369)
"I like the food" (Rögnvaldsson, 1991: 369)

これは今回取り上げた、動名詞対格 yumkinu 可能構文における、非典型的主語と共通点が見られる。すなわち、意味役割上、知覚経験者である Mér と、感覚刺激者である maturinn は、どちらが主語として統語構造化されても自然である。有生性上は、Mér が maturinn より高い。ゆえに、前節で述べた説明を使って、Mér が主語であるという、非典型的主語現象が起こったと説明することが可能である。

また、現代口語アラビア語諸語の中では、存在所有構文に、非典型的主語が存在すると解釈できる現象が見られる。先行研究では、チュニジア・アラビア語について熊切(2010: 256-257)が、エジプト・アラビア語について、Jelinek(2002:80) と Brustad (2000: 153)が、それぞれ紹介している。例文を、Jelinek(2002:80)から挙げる。(4.2-2)は、エジプト・アラビア語の存在所有構文の現在時制の文である。仮に、現代標準アラビア語の既存の規範主義的構文解析を筆者が援用して注釈と訳を施すと以下のようになる。

(4.2-2) ʕanda-ha　　shughl
PREP.PLACEmarker-3FS.PLACE.PSUF　　work.3MS.SUB

kuwayyis. (Jelinek、2002:80)
good

「良い仕事が彼女にある。」

しかし、Jelinek (2002:80)に従えば、この文の主語は shughl ではなく、-ha で表される三人称女性単数である。(4.2-2)の過去時制が、(4.2-3)である。ここでは、はっきりと非典型的主語構文であることが見える。注と訳は筆者が Jelinek (2002:80)を参考に行った。

(4.2-3) kān-it　　ʕanda-ha
have.PAST-3FS.QSUB.PSUF　　PREP.QSUBmarker-3FS.QSUB. PSUF

shughl　　kuwayyis.　(Jelinek、2002: 80)
work.3MS.QOBJ　　good

「彼女は良い仕事を持っていた。」

しかし、エジプト・アラビア語では、以下の構文もありうる。以下は筆者の作例であるが、ただし、アラブ・イスラーム学院以外での調査で筆者が調査した、エジプト出身話者1の同種の例文を参考にしている。

(4.2-4) kān　　ʕanda-ha
exist.PAST.3MSSUB　　PREP.PLACEmarker-3FS.PLACE.PSUF

shughl　　kuwayyis（筆者作例）
work.3MS.SUB　　good

「良い仕事が彼女にあった。」

(4.2-3)と(4.2-4)の両者の違いは、動詞 kān が、be 動詞として活用されるか、have 動詞として活用されるかにかかっている。両者は現在時制では区別できない。非典型的主語の存在の可能性があるのは、(4.2-3)である。この、非典型的主語の可能性のある動詞項について、Jelinek(2002:80)は単に“Subject”という用語を用いている。Brustad (2000: 153)は、“Logical Subject”という用語を使っている。熊切(2010:258)および、それに基づく熊切（2013: パーソナルコミュニケーション）では、この“Logical Subject”説を紹介しつつも、これの主語性には懐疑的である。しかし筆者は、この“Logical Subject”というものの存在を本論文では肯定したうえで、これを非典型的主語と捉える。

この構文について言えば、前節で述べたとおり、存在物乃至被設置物と、存在場所乃至所有者では、どちらが統語上主語になっても同じくらい無標であり、有生性では後者が高い。なので、前節の説明を用いて、意味役割上同じくらい主語になりやすく、有生性がより高いので主語になりやすい、存在場所乃至所有者が、すなわち例文(4.2-3)では、三人称女性単数の人物が、非典型的主語になると説明できる。このことを裏付ける傍証として、Jelinek(2002:80)では、意味役割上の存在物乃至被設置物(theme)であるものが非人間でなく、人間である場合、例文(4.2-3)式と、例文(4.2-4)式の、二種の構文の内、後者の存在物乃至被

設置物が典型的主語になる構文しか用いられず、存在場所乃至所有者が非典型的主語である前者の構文は用いられないとしている。よって、ここでも、意味役割と有生性によって非典型的主語の説明が可能であり、その結果は、動名詞対格 yumkinu 可能構文から導かれた筆者の主張と調和する。

5. 今後の課題

まず第一に、動名詞対格 yumkinu 可能構文が単なるイディオレクトではなく、アラブ・イスラーム学院だけの現象でもなく、現実の現代標準アラビア語として広く使用され、かつ規範的な文脈でも認められているという筆者の主張をより精密に検証する必要がある。

次に、動名詞対格 yumkinu 可能構文と動名詞主格 yumkinu 可能構文との使い分けの実態を検討する必要がある。本論文は、既存の規範主義的文法書が現代標準アラビア語の動名詞使用 yumkinu 可能構文として動名詞主格 yumkinu 可能構文のみを記述していることを批判し、既存の規範主義的文法書に記述のない動名詞対格 yumkinu 可能構文が実際に使用されることを主張した。しかし筆者は動名詞主格 yumkinu 可能構文が現代標準アラビア語で使用されないと主張しているのではない。

筆者の今回の調査では十分データを取れなかったが、現代標準アラビア語において、既存の規範主義的文法書にある動名詞主格 yumkinu 可能構文が実際に使用されている例がみられる。その例証として、まずアラブ・イスラーム学院(2009: 151）の教科書文とその録音では、先に述べたとおりそもそも動名詞が主格であった。また動名詞の格と、主語意識に対する調査が出来なかったため、今回の 4 人による例文の章にあげなかった別のアラブ・イスラーム学院の講師であるスーダン出身話者 4 は、man yumkinu-hu を用いた疑問文と li man yumkinu を用いた疑問文の双方を許容した。動名詞の格変化のデータや主語意識がこの話者から得られていないので、確定はできないが、この話者が動名詞主格 yumkinu 可能構文と動名詞対格 yumkinu 可能構文を双方許容している可能性がある。

以上のことから、アラブ・イスラーム学院内でも、すべての講師である話者が、非典型的主語を含む動名詞対格 yumkinu 可能構文だけを使っているわけではなく、既存の規範的文法書に記載されている、動名詞が典型的主語である動名詞主格 yumkinu 可能構文も、認容している話者が存在することの証拠を少ないものの筆者は保有している。

また、上の章にあげなかった話者で、チュニジア出身話者 1 が現代標準アラビア語に詳しいと個人的に筆者に紹介した、アラブ・イスラーム学院の講師ではなく留学生の話者であるリビア出身話者 1 は、非典型的主語的現象をほとんど見せず、動名詞主格 yumkinu 可能構文をもっぱら使った[10]。このことから、アラブ・イスラーム学院の外でも、典型的主語をもつ動名詞主格 yumkinu 可能構文も話者により現代標準アラビア語として使われている可能性を支持する証拠を少ないものの筆者は保有している。

[10] ただし、動名詞を対格にしそうになったことがある。動名詞を対格にしそうになったことがあるのは、動名詞でなく動名詞の主語を yumkinu の主語として解釈できる可能性を疑わせる。

また、規範主義的な既存の文法書にある動名詞主格 yumkinu 可能構文の存在を否定できるほど、今回筆者があげた動名詞対格 yumkinu 可能構文の例は多くないと筆者は考える。

従って、動名詞使用 yumkinu 可能構文については、動名詞対格 yumkinu 可能構文と動名詞主格 yumkinu 可能構文の両者が、現代アラブ世界における現実の現代標準アラビア語の中で使われている可能性を筆者は考える。これは現代標準日本語の、～ができる、と～を出来る、の併存に類似する。

今後、man yumkinu-hu?と li man yumkinu?の可否、動名詞の格が主格か対格かの質問（今回の講師陣のような格変化を保有している話者に質問対象は限定されるが）を行い、アラブ世界において、現代標準アラビア語での動名詞対格 yumkinu 可能構文と、動名詞主格 yumkinu 可能構文の存在状況について調査することを筆者は考える。

続いて、なぜこの現象が見られるかについての共時的な説明の精緻化である。意味役割、有生性、法述語動詞の主語の動名詞の主語への一致、による説明を筆者は行ったが、最後の項目については筆者自身確信を持てない。また、有生性についても、抽象名詞が動名詞の主語である場合、それは有生性上動名詞よりもよりアニメイトに近いと擬制であれみなしていいのかも筆者は、疑いがゼロではない。ゆえにこの理由付けをもう一度検証して、より良いものにしたい。

それに加えて、アイスランド語などの他言語や、アラビア語系諸言語変種での、非典型的主語保有構文についての先行研究およびその現象との対照を進めることをしたい。

最後の研究課題は、アラビア語動詞 yastaṭīʕu との対照である。これは動名詞や補文節の主語と一致する存在を、その主語にとり、動名詞は目的語で対格であると、規範文法書で記述されており、今回の筆者の調査でもこれに矛盾する結果は出なかった。この動詞と、動名詞対格 yumkinu 可能構文での非典型的主語の存在がどうつながっているのかを検討することも今後の検討課題であることを付け加える。

参考文献

Abdul-Raof, Hussein (1998) *Subject, theme and agent in Modern Standard Arabic.* Richmond: Curzon Press.

Andrews, Avery D. (2004) “Non-canonical A/S marking in Icelandic” In Alexandra Y. Aikhenvald, R.M.W.Dixon, Masayuki Onishi (eds.) *Non-canonical marking of subjects and objects.* Typological Studies in Language 46. pp. 85–112. Philadelphia: John Benjamins publishing company.

アラブ・イスラーム学院 (2007) *ʔal-qirāʔatu ʔal-mustawā th-thālithu: silsilatu ṭūkyū li taʕlīmi l-ʕarabīyati.* First edition. 東京：アラブ・イスラーム学院

――――――――――――― (2009) *ʔal-istimāʕu wa l-muḥādathatu ʔal-mustawā l-ʔawwalu: silsilatu ṭūkyū li taʕlīmi l-ʕarabīyati.* Second edition. 東京：アラブ・イスラーム学院

Brustad, Kristen E. (2000) *The syntax of spoken Arabic - A comperehensive study of Moroccan, Egyptian, Syrian, and Kuwaiti dialects.* Washinton D.C. : Georgetown University Press.

アルジール, ムハンマド ハサン(2006) 「24年間にわたるアラブ イスラーム学院のアラビア語教育」『日本におけるアラビア語の現状　教育と業界のニーズ』51-84. 東京：アラブ・イスラーム学院

エベイド, イハーブ (2014) パーソナルコミュニケーション

Jelineck, Eloise (2002) "Agreement, clitics and focus in Egyptian Arabic". In Jamal Ouhalla and Ur Shlonsky (eds.) *Themes in Arabic and Hebrew syntax*. pp. 71-106.

熊切拓 (2010) 「アラビア語チュニス方言（チュニジア）の非動詞的文」『日本言語学会第140回大会予稿集』254-259. 京都 ： 日本言語学会

——— (2013) パーソナルコミュニケーション

Mujīd, Tawfīq (2014) "Sūriyā: man yumkinuhu ʔinqādh t-turāth?" in ḥadathu l-yawmi on 12/2/2014 of *France*
(http://www.france24.com/ar/20140212-%D8%B3%D9%88%D8%B1%D9%8A%D8%A7-%D8%AA%D8%B1%D8%A7%D8%AB-%D8%A3%D8%B2%D9%85%D8%A9-%D8%AA%D8%AF%D9%85%D9%8A%D8%B1-%D8%AD%D8%B1%D8%A8-%D8%A2%D8%AB%D8%A7%D8%B1/) . 2014 年 4 月 24 日閲覧。

新妻仁一 (2009)『アラビア語文法ハンドブック』東京 ： 白水社

Payne, Thomas E. (1997) *Describing morphosyntax- A guide for field linguists*. Cambridge: Cambridge University Press.

Rögnvaldsson, Eiríkur (1991) "Quirky subjects in old Icelandic". In Halldór Ármann Sigurðsson. *Papers from the Twelfth Scandinavian Conference of Linguistics*. pp. 369–378.

Sigurðsson, Halldór Ármann (2004) "Icelandic non-nominative subjects" In Peri Bhaskararao and Karumuri Venkata (eds.) *Non-nominative subjects volume 2*. pp. 137-159.

若狭基道、Tessema, Gebeyehu Ayele. (2011) 『アムハラ語入門　*Amharic language for beginners*』平成23年度言語研究アムハラ語テキスト1. 東京： 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

Wehr, Hans (1994) *Arabic-English dictionary.* Cowan, J. Milton (eds.) Compact version of fourth edition. Urbana, IL: Spoken Language Services.

Quirky Subjects Used with the Modal Verb *yumkinu* in Modern Standard Arabic

Tomoaki Goto
elessar1014@yahoo.co.jp

Keywords: Modal verbs, Quirky Subjects, Semantic roles, Animacy

Abstract

According to prescriptive grammar, modern standard Arabic does not have Quirky Subject, but only has Typical Subjects. However, this paper argues that the modal verb *yumkinu* "be possible" takes the subject of the verbal nouns as its own Quirky Subject, giving examples from interviews with Arabic teachers of the Arabic Islamic Institute, Tokyo, the usages in the textbooks, and the instructions of the teachers to the students in the Arabic Islamic Institute.

Based on these actual usages, it is highly likely that Modern Standard Arabic, including the register for prescriptive Standard Arabic, allows the Quirky Subject for *yumkinu*.

After demonstrating that the Quirky Subject phenomenon exists in Modern Standard Arabic, I showed why and how this change has occurred, by examining it in terms of semantic roles, animacy, and unification of subjects of *yumkinu* and that of the verb noun. I also showed that there are some cross-linguistic similarities with verb constructions in other languages, such as Icelandic or other Arabic varieties, by comparing their Quirky Subjects with that of *yumkinu*.

（ごとう・ともあき　東京大学大学院言語学研究室修士課程）